注目したいエコカーの新展開

自動車の環境技術が新たな進展を見せている。過去２０年間、動力源が「エンジンを主、電池を従」のハイブリッド車はエコカーの代名詞だったが、その進化形ともいえる次代の技術方式が続々と名乗りを上げ始めた。

日本車が今後も環境技術で世界をリードし、地球温暖化問題や排ガスによる大気汚染の解決に寄与することを期待したい。

近年エコカーの分野では海外企業に注目が集まることが多かった。排ガスゼロの電気自動車（EV）では、新興の米テスラの急成長が脚光を浴びた。

従来型ハイブリッド車から進化した「電池を主、エンジンを従」として走るプラグインハイブリッド車（PHV）については、ドイツ勢が商品投入で先行した。

だが、ここにきて日本メーカーの取り組みも活発化しており、今後の展開が注目される。

トヨタ自動車はプラグインタイプの「プリウスPHV」を全面改良し、国内で発売した。ハイブリッド車の生みの親の内山竹志会長は「プラグインが次のエコカーの大本命」と宣言。電池だけで６８キロメートル走るので、夜充電しておけば、ガソリンを一滴も使わず日々の通勤や買い物ができるという。

日産自動車もエンジンを使って発電し、その電気でモーターを駆動して走る新しい形のハイブリッド機構を開発し、コンパクト車の「ノート」に搭載した。航続距離が短いというEVの弱点を克服しつつ、EVの魅力である静かでスムーズな走りを実現した。

各社が様々なエコカー開発に力をいれる背景には、米欧や中国における環境規制強化の流れがある。従来型ハイブリッド車や既存エンジンの改良だけでは対応が難しくなりつつあるのが現状だ。

世界市場の約三割を占める日本の自動車産業はこうした社会的要請を前向きに受け止め、エコカーの開発競争に引っ張ることで、次の飛躍の機会

としたい。自力だけでは対応しきれない中堅企業には、大手との連携も必要になろう。